

ちょっと近世・ほんと現代 その3

= 目次 =

\$ 柔らかいものの編

\$ ついてるものの編

\$ からだ編

\$ 四季編

\$ 白いものの編

柔らかいものの編

「ご飯。」

「ご飯」といえば白いお米。ほかほかです。

ほかほかのご飯は幸せの象徴。しかし、それはうっすらとした、けれども深い悲しみを帯びたほかほかでもある。

年貢の納め時とか禄なものがないという言葉があるように、日本人にとって、長らくお米はお金そのものでした。お米が不作なら収入も減るし、豊作なら豊作で安く買ったたかれる。

土地持ちの大名ならともかく、禄の低い武士の薄給ぶりは目を覆わんばかりで、たがために中間(下級武士)部屋での博打や、鉢植えのホオズキや、鈴虫を育ててのアルバイトも、黙認されていたのだそうです。

一方、お米を育て守り収穫する人々には百の姓が与えられていましたから、実りの秋を待つよりない武士よりも遥かに豊かで権力を持った農民が、各地に生まれました。

新しい農地の開墾や農業用水の確保、橋の建設や収穫高の向上など、農村の経営に貢献した農民には、名誉とともに刀と名字が与えられることもあったといえます。

豊かに稲を実らせる田は、いわば優良企業。天候に大きく左右されながらも、日本の経済を支えてきました。

「パトロン。」

そして、絵画に投資する農民も生まれました。

絵画に投資するというのは何もバブルの頃に始まったわけではなく、信長秀吉の頃からすでにあったといえます。秀吉の頃には茶道具が流行し、茶道具の目利きだというので命拾いした荒木村重なる武士までいたほどです。

江戸の絵画も投資の対象でした。権力、財力の象徴にもなりました。すべての人が絵画の美しさそのものだけに惹かれていたとは思えません。何しろ経済観念が骨の髄まで染みついた商人や豪農なのですから。

「けれど。」

それでも、飲食代をごまかして競走馬を買ったり、収入役の判子を悪用して銀行から借金してカラオケ三昧で億使う現代の武士より、米を作り育てるというまっとうな家業で名を成した人々には、投資する資格があると思うのです。

飲食代をごまかすには、ごまかされる側が必要です。判子を悪用するには、そんなに借金してどうするのよ、とは全く思わない出納役だの収入役だのの判子と、判子があったらなんでもかんでもすぐに貸す銀行が必要です。

容赦ない自然災害との戦いや幕府の圧制との戦いとは、まるで程度の違う。工夫とも努力とも精進とも無縁の、ただの汚れた仕業。

そんな人々には、ほかほかのご飯をありがたくいただくという気持ちは、おそらく微塵もないのでしょうか。

いかがでしたか。新しいMac買いました。インディゴ。白いTシャツとスリムジーンズといった感じ。

お店で見るのより画面も大きくて明るくて見やすい。惚れ惚れ。

「犬。」

春はお別れの季節です。そして支払いの季節でもあります。旅立っていくのは、何も友人ばかりではない。お札も旅立っていきます。重いコートを脱いだら、懷までも軽くなりました。

そして春は、犬の季節でもあります。予防注射が近所の公園で行われるからです。白い犬黒い犬大きな犬が、ある時は上品にステップを踏みながら、ある時は飼い主に強引に引っ張られて集まってきます。

運のいい犬は、自分が注射されたことも知らずに済みます。運の悪いのは、何か恐ろしいことが行われているのだという気配を察知したのでしょう、吠えまくり尻込みしまくり、引き綱もろとも逃亡しようとして車にはねられそうになり、飼い主にもものすごく怒られて、この世で一番恐ろしいのは飼い主だということを思い出し、しっぽを丸めてすごすごと戻って来たりしています。

飼い主が怖くないのもあります。足の間に挟んで、と獣医さんにアドバイスされるのですが、犬はああ見えて結構ぬるぬるしていますから、つるりつるりと逃げ出します。それでも、その拍子に飼い主が尻餅をついたりすると、一人前に心配したりします。

「猫との違い。」

猫は人間に対して、「棲むところも食べ物も寄越すから、俺がこいつの主人だな」と思い、犬は全く反対に、「棲むところも食べ物もくれるから、この人が僕の主人だな」と思うのだそうです。猫のふてぶてしさを嫌う国は割に多くて、韓国では猫の置物は人気がないのだそうです。西欧ではそもそも日本のように動物を神格化するということがほとんどされません。

日本では招き猫になったりキャラクターになったりして有り難がられますが、猫が幸運を呼ぶというのは万国共通ではないようです。

対して、犬は他の強い動物から人間を守ってくれますから、原始の時代などには強い味方でした。人々は犬を大きくあるいは小さく改良し、羊を追ったりウサギ

を捕まえたりもっと大きな動物を狩ったり重い荷物を運んだりという仕事をさせて、人間の労働を軽減しました。

ですから、犬は猫に比べて遙かに多様な形態を持つことになりました。

「なんだから。」

大きな犬も小さな犬も、すべて同じ犬です。けれど、特に洋犬では、その大きさや姿、毛の長さや耳の形、しっぽのあるなしまで、実に個性的。

その点では、日本犬はおおむね短毛、短足、胴長、ぴんと立った耳に巻尾。色は白黒茶。

茶色くて痩せたのは、遠い親戚の狐にそっくりです。長澤蘆雪(ろせつ)の描くところの犬は、するりと面長。どこにでもいる、当たり前の犬の姿です。

労働や愛玩に特化されて原型を止めない犬の姿は、彼ら自身の罪ではない。けれどどうしても、そこらにいる天然自由に繁殖した、するべきであろう犬の姿を彼らの上に重ねてしまうのは、勝手な話ではあります。

いかがでしたか。もう四月なのに各地で雪の便り。

「うどん。」

何故うどんを選んだかという、夕飯がおでんで、おだしが美味しくできたのでうどんを入れて、ああ韻を踏んだなあ、と思ったからなのでした。

うどんの発祥の地は東南アジアだという説にもあるように、日本人が発明したものではなさそうです。うどんは「餛飩うどん」と蕎麦や盛り飯と一緒にされた時代もありました。餛は餛飩。あまり懐具合がよろしくないときにお腹を宥めるためのもの、という意味でしょう。ちょっとしたおやつにする程度のものであったのでしょう。

そんな餛飩の餛飩を入れる箱が餛飩箱。徹夜の門番でその場を離れられない武士などが、夜食にざざっと食べてざざっと返すので、そっけなく冷たいことをつけんどん、というようになったとか。

確かに、小麦粉で練った食品であるうどんは食生活に溶け込んではいませんが、主食ではありません。

「不思議なもので。」

穀物の食べ方には、大きく分けて粉食と粒食があります。粉になるものの代表は麦。粒のまま食べるものの代表は米。

粉になった小麦はパンになりパスタになり、餃子になり饅頭になりました。面白いもので、中国では穀物は粉になったものを加工して食べるが多く、私たちからみるとパン食文化です。餅は中国では小麦粉でできたお菓子や軽食を意味します。

そしてお隣韓国ではご飯が主食で、ご飯に合うおかずも山ほどあるのですが、粉でできた饅頭やラーメンはあまり喜ばれません。

そして日本ではもちろん主食はご飯、けれど小麦粉でできた饅頭やラーメン、そば粉でできた蕎麦をこよなく愛する人々がいます。

「それはだしの違い。」

それはきっとだしの違いなのだな、と大宮は思いました。

私は横着者なので、だしは日本式のしかとりません。骨から取る洋式のスープは、手間とガス代がかかって仕方ないからです。

中国式のスープは無添加の鶏ガラスープや豚骨スープ、韓国式のスープはそれに粉唐辛子やラーメンスープを入れてます。すみません。

日本式のだしは魚から取り、中華風韓国風のだしは哺乳類の骨から取ります。そういえば東南アジアの調味料は魚から作られています。ナンプラーは鰯を発酵したもの。東北地方ではしょっつろとして有名です。

魚のだしは小麦と合うけれど、骨のだしは小麦とは相性が悪いのではなかろうか。特に、小麦の色と香りそのままの饅頭は。そば粉の入った韓国冷麺は骨のだしには合うけれど、魚のだしでは弱いのでは。

たぶん、イノシン酸やらグルタミン酸やらの働き具合が違うのでしょう。そして、あれこれ理屈は抜きにして、日本人は世界中のどんな民族よりも、きっと麺類が好きなのでしょう。

いかがでしたか。インスタントの冷麺、ゆで卵とキュウリとキムチを乗せて食べれば、もう夏です。

「皮。」

皮の服には、ほとんど縁がありません。

なにしろ関西は暑い。真冬でも電車の中やスーパーの中は汗をかくほど暑い。皮どころか綿のジャケットでもマフラーさえあれば冬を乗り切れます。

そういえば、セーターをほとんど着ない冬もあります。タンスの中でやたらと場所をとっている割には活躍の場の少ないセーターを、今年もクリーニングに出さずに済みました。

それに、薄いぺらぺらの夏物もそんなに多くありません。冷房の利いているところですぐに袖を伸ばせるように、真夏でも長袖を着るからです。アンサンブルたらい、同じ色柄のカーディガンと半袖のセーターの組み合わせ、特に弱々しい紫色のやつが大っ嫌い、なのですが、暑い日であればあるほど鞆の中のカーディガンは頼りになります。

景気が悪くて物が売れないのだそうですが、暖めすぎや冷やしすぎをもう少し何とかすれば、私のように一年中春秋もので過ごす横着者も減るのではないのでしょうか。

「洒落もの。」

それでも皮が欠かせないのが靴です。

私は、ぎりぎりの季節までブーツを履いています。ランニングにジャケットを羽織っているくせに、足下が茶色のショートブーツで、花見に行ったりします。

京都の着倒れ大阪の食い倒れ。ならば神戸は何でしょうか。履き倒れです。もちろん呉服屋や飲食店が倒産するという意味ではありません。

お金を使いすぎて身代つぶす、という意味です。そのくらい、神戸は靴の種類もデザインも豊富です。

私が履いてきた靴も、銀に水色とピンクのラインの入っているサンダル、深緑色のエナメルに同じ色のビロードの大きなリボンの着いたの、つま先と踵はラメ入

りの皮で側面はぴったり土踏まずにまで張り付いてくる黒のブーツ、などなど、ちょっと変わったものが多い。

そういえば、二十年ほど前に履いていたサンダルは、ジュートか何かのざらっとした素材が虹色に染められて足の甲を横切っていて、つま先は五センチ、踵は十センチ近い高さがありました。底の素材はコルクだったのでとても軽く、裸足に自転車ラッパジーンズ、というのが私の中学時代の休日スタイルでした。

「ちょっとだけよ。」

江戸時代の皮は、高価でした。それに、表向きには肉食を戒められた時代、皮も堂々と身につけられるものではありませんでした。戦国時代なら武具などに用いられることも多かったのですが、江戸時代に入ると刀の鞘や着物の裾に用いられ、遊び人の象徴になりました。

昔バンドをやっていた友人が、「ロッカーは冬はランニングで夏は革ジャンを着るものなのだ」と話していたことがありました。ロッカーというのはもちろん体操服を入れたりするのではなくてロックをする人々のことですが、ロッカーというのはいろんな意味で体によくないことをしなきゃならないのだなあ、と半分感心して半分呆れました。

けれど、満員電車の中で通気のよくない革の通勤靴は窮屈なだけでしたが、通勤の必要がなくなった今、皮の強さとしなやかさをゆっくり感じられるのは、そう悪くはないと思います。

いかがでしたか。でも、革靴が心地よいほどに乾燥しているのは今だけ。今のうちに履きましょう。

ついでるもの編

「取っ手。」

怖い夢は、あまり見ません。夢は夢だと分かっているからです。

それに、本当に怖くなれば、自分で自分の目をこじ開けてしまえばいい。夢は

レンタルビデオのようなもので、見始めてしまったからといって最後まで見る義理などありません。

けれど、自分の目をこじ開ける、という方法が通用しなかった時もあります。

母の実家に泊まるときには、仏壇のある大きな部屋で寝るのが常でした。大きな部屋には当然大きな簞笥が何棹も並んでいて、簞笥の方を頭にして眠りました。

線香の香りや母と祖母の際限のないお喋りや気の強い猫の足下からの侵入などの妨害にもめげず、やっと眠りについたというのに、怖い夢。

ほとんど雪が降らないはずの町に雪が降り、土の混じった雪を固めての雪合戦。敵は霰のように球を投げてきます。なのに、私の手は振りかぶったまま、前に出すことができません。肩を回せないのです。焦れば焦るほど、敵の玉は多くなり、私の足元に積もります。

おそらく、本物の雪玉の衝撃を知らなかったからでしょう、玉は私にはほとんど当たりません。けれど反撃できないまま仁王立ちというのは悔しい。

脇の下が引きつって痛くなるほど力を入れても、やはり腕は動かない。

これはもう、どう頑張っても無駄だ、頑張っても無駄だという夢なのだから、見ても無駄だ。と、目をこじ開けようとしたのに、腕はやはり動かない。

夢の中とは無関係に動くはずの腕が、全く動かない。

「なんと。」

ということは、これは夢ではないのだろうか。

けれど、画像は周囲がぼやけたようになっているし、色彩も薄い。友達の歓声は明瞭ではないし、全く寒くないし、手の中で解けているはずの雪玉も冷たくない。第一、数だけはわらわらいる友達の中で、きちんと名前を思い出してあの子は誰だと言いつてられる者が一人もいない。友達は、友達であろう、という印象だけがぼんやりとある。

それはまさに夢の中。

そして、夢の中には私の言葉はありません。話せないのではなく、話さないのです。夢の中の言葉が寝言になってしまうのが嫌だったし、起き出した親に心配されるのも、赤ん坊のようで嫌だった。夢の中の私はとても寡黙でした。

だから、助けは呼べない。けれど、あいかわらず腕は固まったまま動かない。

「うー」

苦し紛れに、寝返りを打ちました。夢の外にいる私の身体が向きを変えると、指先に、ぱちん、と妙な痛みが走りました。

途端に目が覚めると、私は布団の中で右手を振り上げていました。かちんかちん、鈴のような音で揺れているのは筆笥の取っ手。

年代物の取っ手の金具は、中心が手前にふくらんだ太い針金の両端がはめ込んであって、ぶらぶらと自由に動くようになっています。よく似ているのは、西洋のお屋敷などの扉のノッカー。ライオンの口に輪が嵌っている奴。あれと同じです。ううむ、説明が難しい。

その取っ手に引っかかった指が、動かない腕の原因だったのです。

「連想。」

ですから、私にとって枕元の筆笥は脅威となりました。今風の筆笥は筆笥ではなくてタンスなので、取っ手はちりちり揺れたりせず、指を下から差し込んで開けるようになっています。

けれど、夢の私も現実の私も捕まえてしまう取っ手は、枕元に置くべきものではなくなりました。

あれ、今回は近世がなかった。でも、母の実家は少なくとも明治の終わり頃には建てられていたはずですから、あの筆笥は江戸時代の終わりから明治の半ばくらいのもので、だったはず。たぶん。

さらに、前回の「皮」について。「皮」は鞣していない生のもので、「革」が正しいのではないかと。ごもっともです。

「葱。」

私は気まぐれなので凝った料理は気が向いたときにしか作りません。

で、たまたま気が向いたので、葱を使ったちょっと手間のかかる料理を作ってみました。材料は挽肉。本には合い挽きの肉を使うようにありますが、鳥の挽肉も

ちょっと混ぜてみました。それに椎茸。塩胡椒。生姜に卵も入れて。堅さは小麦粉か片栗粉で調節。

要するに和風ハンバーグの種に、片栗粉をまぶした葱を貼り付けていきます。それを湯気の上がった蒸し器で十分。できあがり。葱の緑がなかなか美しい。

にぎり寿司の寿司飯の形と大きさが、一番葱を貼り付けやすい。蒸し上がったから千切りの野菜の上にくろくろと並べて、ぽん酢などでさっぱりいただきますよ。

もちろん、これは私の考えたレシピではありません。

オリジナルのお料理を考え出せる人と、朝起きてお弁当を作れる人は凄いなあ、と思います。料理研究家でなくても、普通の主婦の方が栄養バランスも見た目も価格もばっちりな料理をどんどん考え出す。

前出のレシピも、そんなメニューの一つ、「わが家のおかず」というコーナーに掲載されていたものです。

他にも、揚げたジャガイモとニラと挽肉の炒め物。これもまた美味しい。

味の基本はからっと揚げたジャガイモの風味で、合わせる野菜は濃い色の野菜なら春菊、肉の脂が気になるなら薄切り肉でも美味しい。味付けも、ジャガイモの風味があるのでそんなに濃くしなくてもいい。オリジナルは醤油とお酒でさっぱりと仕上げていますが、私は肉にオイスターソースを揉み込んでおくのが好き。これもまた美味しい。

「出典。」

作りやすく美しく美味しい料理が満載の、そんな夢のような本。その雑誌の名前は、オレンジページ。1989年の増刊号です。

ダイエーに行くとレジの横に並んでいて、買い物ついでにカートに入れるのがトレンドのようになりました。

他の女性誌のような、自立したくてできない女性の苛立ちが悪口の固まりとってじとじとあふれ出してくるようなページは少なく、電子レンジで作るお餅やカラメルで作る乳酸菌飲料という、化学の実験のようなページが印象に残っています。

後発の同じような雑誌もありますが、やはりオレンジページの持つ独特の雰囲気

気、生活を楽しもうという姿勢が不自然でなく現れた雑誌は、ないように思います。

「オリジナル。」

江戸時代にオリジナルだった人物、平賀源内。特に有名なのは土用の丑の日。丑の日に鰻を食べよう、というのは鰻屋のキャッチコピーだったそうですが、暑い日に栄養価が高く塩分の濃いものを摂るというのは理にかなっていませんから、今でもさかんに使われています。

本当の意味のオリジナルというのはそうしたもので、他者が少々手を加えても、時代が変わっても揺るぎなくあるものです。

少し前、経営が危ぶまれるダイエーに昔の幹部が戻ってきて社員にハッパをかける、というドキュメンタリーを見ました。

彼らは、人気のあるブランドの店舗作りを参考にしようとしていました。人気のあるブランドの集客力に頼ろうとしていました。

そして結局、どんな商品を買いたいのか、というのは、一つも見えてきませんでした。

生活に密着した物を大量に安く売る、というのは、かつてのダイエーのオリジナルだったでしょう。それはあらゆる業種に浸透し、安売り競争とデフレと不況の元凶となりました。

けれど、それはダイエーひとりの罪ではない。そして、同じように安くてもダイエーに集客力がなくなったのは、売りたいものが何か見えないから。何を売りたいか、どんなものが需要とされているか、考えなくなったから。

夏に鰻は脂っこい、けれども江戸時代にもすでに健康志向がありました。戦争のなかった時代、長く健康に生きることが最も重要視された時代。だからこそ、夏こそ滋養のあるものを摂りましょう、というフレーズが受けたのです。

そして今は、スタンダードな形にスタンダードな色合い、家族みんなを着回しができる、家族みんなの分をカートに入れて買っても一万円にお釣りが来る、そのオリジナリティが業界を牛耳っているのです。

今回は珍しくカタカナが多かったなあ。

「名前。」

自分の本名が好きだという方はあまり多くないと思いますが、私も実は嫌いで、一番の理由は聞き間違えられることがとても多いことです。

特に電話です。あれこれと好きなように間違えられて、そのたびに訂正しなければなりません。聞き飽きた自分の名前を電話で連呼しなければならないほど馬鹿げたことはない。

それに、多い名前ではありませんが珍しくもない。さらには漢字が全部直線で書ける。美しくありません。なんで「篠原」とか「細川」とか「早乙女」とかいうさらさらと流れの良い音や見栄えのする漢字を用いなかったのか。

文句を言うにも、言う先がありません。

そして、下の名前もまた間違えられやすい。そしてこれまた、多くはありませんが珍しくもない。

「類は。」

同姓同名を見つけることも、多くはありませんが少なくもない。

新聞で、「京都で音響関係の仕事に就いていて、休日には友人と集まって食事会を開いている」同姓同名さんを見つけたことがありました。

年齢もちょうど同じで、彼女はガーリックトーストをこてこてと作りながらのびのびとインタビューに答えていました。私は高校時代放送部だったしガーリックトーストも好物なので、私のことだと思った友人もいるかも知れません。でも違います。

文芸雑誌の小説の投稿欄で見つけたこともある。私はその雑誌には投稿した覚えがなかったのですが、もしかして間違えて送ったのかも、としげしげ眺めてしまいました。でも違います。住所がイタリアだったからです。

かくのごとく、私の本名は珍しくも何ともありません。

「こんなところに。」

姓だけなら、もっとどこにでもあって、とある酒造記念館の展示室、酒造に関連した書類の署名に見つけたのは、大久保利通などと並んでいましたが、一番右にある。

と言うことは、つまりは一番身分が低い。小役人は先祖代々なのでした。

そして、明治十年に日本に訪れ、貝塚を発見したことでも有名なエドワード・S・モースの目にも、私の姓は留まっています。

玄関の襖の上に並べられた提灯には、家紋と名前が書かれています。

日本人の提灯好きは海外でも有名だったそうで、

「あかるい月夜でも、これを持ちあるく。しかし火事でもえている建物のうえで、おおぜいの火消したちが、手に手に灯のついたチョウチンをもってさわいでいる光景ほど、外国人の目にはばかばかしくみえるものはない。」

とあります。

私は日本人ですが馬鹿馬鹿しいと思います。おそらくは、毒をもって毒を制する、といった意味だったのでしょうか。

そして、その馬鹿馬鹿しいものに付いているのが私の姓です。直線が多いので書きやすかったのが幸いしたのかどうなのか、漢字を使わない国の人々が漢字を書いた時によくある、文字の奇妙な歪みはほとんどありません。

でも、もしかしたら、書きやすいからわざわざ選んだのかも。「武者小路」とか「蓬萊」とか「有栖川」もあったけれども、スケッチしづらくて、そこらの小役人の名前を失敬したのかも。

などとあれこれ想像を巡らせている間は、少しだけ本名が好きになります。

参考文献　日本のすまい・内と外　エドワード・S・モース上田篤・加藤晃規・柳美代子訳 鹿島出版会

いかがでしたか。自分の名前を検索すると、結構面白いですよ。

からだ編

「顔。」

心霊写真を扱う番組が、最近は季節を問わずあります。視聴率が取れるからなんでしょうね。ああテレビは悪どい、とか何とかいいながら、結構好きで、よく見ます。

何で写真にだけ写るのか、何で写真でなければならないのか、それは専門家の話を聞いてもよく分かりませんが、やっぱり変な物が写っているのは気持ちのいいものではない。

それにしても、どこでも彼処でも写真を撮りまくるから見なくてもいい物が写るわけで、そういう不作法な態度だから気味の悪い思いをするのだ、とかなんとかいいながら、「これはやっぱり顔だ」などと、つい言ってしまう。

実際、写真そのものよりも、写真を送ってきた人々の方が恐ろしいこともある。子供を抱いている母親らしき人物の顔色の悪いこと、被写体になっている男性の行儀の悪さ。

それに、たいてい写真を送ってきている本人の顔は目のところが隠されていて、顔がはっきり見えない。それなのにあってはならない場所に写っている「顔」には何の修正もされていなくて、この人々のプライバシーはどうなるのだ、などということまで考えてしまう。

「丸三つ。」

それに、何か言いたいことがあるのならはっきりいえばいい。写真に写って、見た人に気持ちを分かってもらおう、なんて言うのは他力本願です。

とかなんとかいいながら、話のうまい専門家が、「きちんと供養してあげたら、このお店にもいいことあるからね」などと言うと、「そうかあ、きちんとしなきゃなあ」と、当事者でもないのに納得してしまう。

丸が三つあれば、それで顔に見えるのだそうです。というより、顔に見たがるのだそうです。あれは顔で、きっとそれは誰かなのだと、何か意味のあるものなのだと思いたがるように、人間はできているのだそうです。

それと同じように、もしかしたら単なる現像の失敗かも知れない白い陰に、そこにあるべき意味を見いだそうとしてしまうのでしょうか。

「逆さま。」

江戸時代は明治直前にならなければ写真はないので、心霊写真もありません。けれど、岩に人の顔が浮かび上がるとか、海の底から手が出てくるといった怪談話はありましたし、戸板をひっくり返すといないはずの人が出てくる、破れた提灯が人の顔になる、というのがさかんに舞台上で演じられましたから、何かを人の顔として見る、そして怖がる、あるいは面白がる、という習慣はあったようです。

笑っている顔が逆さまにすれば怒った顔になる屏風、男の顔の中に狸が寝そべっている戯れ画。実に曖昧で、取り替えも簡単に効くその顔に、どんな意味を託すのでしょうか。

いかがでしたか。私の友人には丸顔がとても多いです。丸いのを選んでいるのか、と思うくらいです。

「首。」

首にまつわる言葉は、かなりあります。首に縄を付ける、首根っこを押さえる、首が繋がる、首を長くする、首を縦に振る。

ありますが、普段の生活で使うことはほとんどない。

そんな首を、使われたことがあります。私は田舎の住宅街で育ったので、家にはお約束のピアノがありました。先生は通いで、おかげで土曜の午後は遊びに行きませんでした。

それでも私の横着は生まれつきで、ですから当然練習は大嫌いで、私は先生にいくつか名言を吐かせています。

「私の前で練習するんじゃないやしません。」鋭いです、先生。

「次の発表会には首に縄を付けてでも連れて行きます。」

あ、こういう時に「首に縄を付ける」というのをを使うのか、勉強になるなあ、と感心した覚えがあります。

「自由。」

普通女の子というのは、ピアノの発表会に綺麗な服を着せて貰うのが嬉しいの

で、自分の首に縄を付けてでも行きたがる、そういうものなのだそうです。

私はそういうものではなかったので、母親が買ってきたワンピースを黙って着ていました。

それでもさすがに母親は私と生まれた時からのつきあいなので、ぴらぴらのレースやちゃらちゃらのスカートが嫌いなことは知っていて、最初のワンピースは色こそピンクでしたが、形はアーミースタイルのコートのようで腰をぎゅっと締めるベルトが付いていました。

次の年のワンピースは上半身はニットでカフスが黒、長い真っ黒なスカートのスリットにはエナメルの切り返しと赤いモールが付いている、一見すると修道服のようでした。

見かけは堅いのですが、ニットなので上半身は動かしやすく、スリットも結構深いので歩きやすい。私はそれをとても気に入って、二十年以上経った今でも着ています。

思えば、自分の好きな服を着て行けたのは、ピアノの発表会くらいでした。中学も高校も制服で、似合うも似合わないも関係なかった。

服装の自由は学校生活の敵、なのだそうで、同じ服を着て同じ顔つきで同じ教科書で勉強することこそが美しい、のだそうで、ですから自分の服の趣味がいいのか悪いのかもよく分からなくて、いきなり化粧が濃くなってしまった友人を、何人か知っています。

「勝手に。」

江戸時代の寺子屋は出席も退席も自由。絶対評価ですから、自分の好きなように学べます。授業料も現金でなく、大根やお酒やお菓子で構わなかったところもあるようです。

だから、首に縄を付けられることもない。

そこには自ずと自主性がありました。確かに合理的ではなかったでしょうが、平和の中の自由を謳歌する喜びに溢れていたのだろうことは、想像に難くありません。

いかがでしたか。学歴って、運転免許みたいになってしまいましたね。

「肩。」

日本人はなで肩が多いので、肩凝りしやすいのだそうです。大宮が思うに、長い間床に直に座る生活をしていたのに、近代になって急に椅子に腰掛けなければならなくなったから、というのも、肩凝りが増えた一因だと思います。

昔はむしろ、肩よりも腰が凝っていました。農作業は腰をかがめることに始まって腰を伸ばすことに終わる。立った状態での作業がほとんどですから、座ることはすなわち休息でした。

けれども椅子の生活では、足は床に着いているだけで身体全体を支えているわけではなく、十キロ以上ある頭の重みのほとんどは肩と腰にかかる。立ち上がることは腰を伸ばすことですが、ずっと立っていても今度は足が疲れる。歩き回るのが一番疲れを取るのに有効なのですが、ただでさえ狭いオフィスをうろうろするわけにも行かない。

通勤の過程で歩くことができれば少しはいいのですが、歩くどころか体の向きを変えることさえ不可能な通勤ラッシュが待っている。座っているにしても、前やら後ろやらに揺れることで、腰には想像以上の負担がかかっています。

かくして椅子の生活では、休息を取ることはなかなか困難です。活動と休息のメリハリを付けるのが難しい。すなわち、ずっと肩はこわばり続け、ずっと眼は使われ続け、疲れは発散されずに滞っていきます。

「横。」

椅子で疲れた身体を癒したいなら、横になるしかない。

お昼寝の習慣のある国は、多くあります。有名なところではスペイン。熱帯地方では気温の上がる日中に横になっているのは普通のことですし、お隣の韓国や中国でも、オフィスに莫座などを持ち込んで仮眠を摂ることは、少し前には珍しいことではありませんでした。

けれども肩凝り日本人のビジネススタイルは国境を越え、昼休みには素早く牛丼などを掻きこみ、携帯の電源は決して切らないのが主流となってきているようです。

「筆は。」

面白いもので、日本の文字は昔は縦書きで、けれどそのころの人々は今よりも遙かに横になって休める時間が長く、今は横書きが主流になりつつあるのに人間は縦になったまま、一日中過ごさなければならなくなった。

昔の方が重労働で、今は機械化されて楽になった、と一般には考えられていますが、実は畑仕事や大工仕事、職人仕事にはいつでも横になれる場所がありました。動力は人力、せいぜい馬力か牛力ですから、おのずと限界があります。何十メートルの高い場所に登ることもないし、必要もない。何千キロも離れた国に行かなくてもいい。

位置エネルギー、という言葉があります。重量のある物が高い場所にある。高いところに持ち上げるためにはエネルギーが必要です。遠いところに移動するためにもエネルギーがいる。

私たちは、エネルギーの中に生きています。そして、そのエネルギーの中にいることこそが労働だと思っている。

そのエネルギーは熱を運び、私たちの周りを囲んでいます。その外に出ることはとても困難で、時には死をも意味する。ああすなわちこれが閉塞感なのだと、一人で納得するこのごろです。

いかがでしたか。関東は雷雨、関西は霧。けったいな梅雨です。

「腕。」

腕の見せ所、という言葉があります。実力を発揮するにふさわしい場所とタイミング。見せ所で振るえる腕にこそ、腕としての価値があります。

けれども、能ある鷹は爪隠す、とも言います。この場合、鷹の爪と腕は同じ、能力に実力に才能。どんなにすばらしく美しい爪や腕でも、出しっぱなしでは風邪を引いたり傷が付いたりして、いざというときにはなまってしまいます。

腕や爪は、その時のために磨いたり研いだりしておくべき物で、見せびらかしたりひけらかしたりする物ではありません。

「丸出し。」

ですから、腕を丸出しにしているのは、絵画の世界では鬼や神様。その神様にしても大抵は子供の神様で、大人はせいぜい見せるとしても肘くらいで、白く輝く二の腕は袖の中にしまっています。

例えば、曾我蕭白(しょうはく)描くところの仙人や賢人は、つむじ風にあおられて飛ばされても、めったに二の腕まで見せることはありません。けれども鬼は、真っ青な腕に金の金輪まで着けて、その筋肉の盛り上がりを誇張しようとします。

腕が丸出しというよりは、鬼は大抵上半身裸。ぼってり突き出た下腹まで青い。そして、小刀のような爪まで剥き出して、大きな口をぽっかり開けています。

けれども、龍に跨る仙人や、蝦蟇と戯れる仙人は、濃い色の衣をしっかりと身に纏い、荒く伸ばした髭だけを風に纏れさせています。

彼らの腕や肘は、おそらくは鬼と同様に堅く節くれ立ち、切り落とされた枝の跡のようにぐるぐると渦を巻いて角質化しているのですが、それを露わにはしません。

つまり、決して手の内は見せないのです。

「感性。」

感性を伸ばす、という言葉が教育書の帯などでよく見受けられます。

この、感性という言葉。やさしさ、命の大切さなどと同様、私が消化不良を起こしてしまう言葉の一つです。

感性というのはすなわち感受性で、それには裏打ちされるべき理性と常識があるのだ、つまり袖の中に隠された腕のように、ひっそりと、しかし確かに光り輝くものだ、と私は思っていたのですが、どうもそうではないらしい。

感性は子供のうちから育てなければならない物で、そしてそれは全ての子供に等しく与えられている物で、だから感受性の芽を決して摘んではならないので、大人は子供のやりたいように自由にさせてやらなければならないのだそうです。

子供の腕はむき出しにされ、白々と光り輝くべき物であるらしい。

ですから、子供の感受性のために、親子で山登りをするときには、子供主導で

なければならぬのだそうです。

主導と言うからには、導くのは子供なのでしょう。大人は子供の後を付いて行くのです。素晴らしい感性の持ち主である子供に。

その小さな腕に導かれる人々の明日が、どうぞ文字通りに明るい物でありますように。

いかがでしたか。ひんやりどんより。梅雨ですね。

「肘。」

ピザピザピザ、と、十回誰かに言って貰いましょう。そして肘を指さしながら、これはなんですか、と質問しましょう。

相手が「膝」、と答えてしまったら成功です。

私はこれを妹に仕掛けられて、「ピジ」と答えて、大笑いされました。こういうものもあります。みりんみりんみりんみりん、と、十回言います。そして質問は、「鼻の長い動物は？」

ふつうは、「キリン」と答えてしまうのですが、ピザでやられてから三日ほどしか経っていなかったのも、今度こそ引かかるものか、と必要以上に緊張していた私は「ピリン」と答えて、

「お姉ちゃんは面白いように引かかるなあ」と言われてしまいました。反論できませんでした。

「どっちが先か。」

言葉を勘違いして覚える、言ってしまう、というのは実はよくあることで、美しいのは故向田邦子氏の「眠る杯」。「荒城の月」の歌詞の「巡る杯」の聞き間違いですが、過去の栄光を懐に抱くようにして眠る杯というのも、また佳し。

笑えるのは、林真理子氏の「社内恋愛は出世のたまさげ」。「社内恋愛は出世の妨げ」の間違いです。でも、たまさげの方が的を得ているような気がするのは何故でしょうか。

こういうものもあります。皆川博子氏が、本屋の店頭で実際に耳にした言葉だそ

うです。「男性玉揺れという本を下さい」。「乱世たまゆら」なのに。

どうも、人間エッチな方へエッチな方へと聞き間違える傾向にあると思うのは、大宮だけでしょうか。

「ええと。」

聞き間違いが一般化しているので有名なところでは、「あたりまえ」があります。江戸時代の頃のことだそうで、これは、「当然」の然を前に書き間違えて、「当前」になってしまったところが、そちらの方が定着してしまったのだとか。

そこで、私自身聞き間違えてしまった言葉があるかどうか、思い出してみました。ううん、思い出せない。

どうも私は、間違いを間違いだと思わずにそのまま貫き通していくか、間違っても笑って終わって忘れてしまっているらしい。間違いに対する恐怖がないと言えば聞こえはよいのですが、どうも学習能力が低いらしい。

ということは、私はこれからも数限りなく聞き間違い言い間違いし続けるのでしょうか。怖いような、楽しいような。

いかがでしたか。いきなり暑くて、七月になったのを忘れていました。

「爪。」

爪の中に白い星ができるのは衣装持ち、と昔は言いました。

何かのきっかけで爪の中に空気が入ってしまうのが原因だそうで、衣装持ちというのにはおそらく何の根拠もないのですが、常に一つ二つ星を持っていた私は、ちょっと得意でした。

衣装持ちだというのではなく、私の手の大きさの割に粒の大きな爪の中で輝く星は、とても目立ちました。しかも薬指によくできたので、目立ちすぎずさりげなく、けれど手を動かすとぴかりと光りました。

どういうわけか、成人した頃から星は出なくなっていまい、衣装持ちではないことも、今も昔も変わりません。

「目立たない。」

江戸時代の絵画では、爪は男女ともに小さく可愛らしく描かれます。もちろん赤く目立ったりはしません。ほとんどの場合は省略されていますし、輪郭が取られていても白いままの場合が多い。ただ、描かれる人物によっては爪は恐ろしく目立ちます。例えば長澤蘆雪(ろせつ)描くところの山姥。爪は伸ばし放題で深い筋が走り、その根本には黒く汚れが貯まっています。しかも先が恐ろしく尖っています。

その爪は自分の指先を守るためだけでなく、足元にまとわりついている子鬼を守るために、時には武器にもなります。

さらには曾我蕭白(しょうはく)の鬼。鬼なのですから、もちろんその角と同じように尖りまくり、足の爪まで長く伸びて、地面に突き刺さるようです。

鬼の爪は武器でもあります。荒れ狂う風に飛ばされぬよう、岩にしっかりしがみついためのものでもあります。獣とともに暮らす山の中では、実際には爪は石や木の根に削られて、そんなに伸びなかったかも知れない。

だとすると鬼どもの爪は、爪を伸ばせるほど動かなくても良い、爪がすり減るほど動かなくても良い、それだけ貴族的であるということの証なのかも知れません。

「ということは。」

西洋の女性はよく爪を伸ばしています。手を使わなくても良い、家事をしなくてもいい、一日中マニキュアを乾かしてられるという証なのでしょう。

ということは、西洋の女性は鬼だと・・・いや、そんなことは申しません。日本の女性も爪を伸ばします。綺麗にマニキュアを塗って、剥がれかけたら除光液でふき取ってまた乾かし、塗っては乾かし。

手が小さいから爪を伸ばすのだ、とおっしゃる方。上げ底靴を履くのは背が低いからだ、というのと同じ理屈なのでしょう。

けれども、他人の目というのは恐ろしいもので、上げ底の分の高さを差し引いて、その人の身長を測ってしまいます。それと同じく、それだけ爪を伸ばすからにはもちろん家事はしない。

いずれにせよ、年輩の女性は、爪がどうであれ若い女性は家事はしないできな

いと決めつけているので同じことですが、本来若い女性がターゲットとするべき若い男性はどうなのでしょう。

全ての男性が、家事のできる女性を好きなわけではない。意外に家庭的な女性にはもてないものなので、爪を美しく飾ることには相応の意味はあるのかも知れません。

ただ、旅行先で夜寝る前に、ベッドに寝ころびながら除光液を使うのだけは、どうかどうか、やめて頂きたい。

いかがでしたか。一時期、鹿の皮で爪を磨いていたことがあります。ピカピカを乗り越してビカビカになります。面倒なのですぐにやめてしまいましたが。

「唇。」

唇マークと言えばRolling・Stones。おおっ、一発で変換されました。辞書にも入っているのですねえ。

若かりし頃はジーンズの膝の破れ目にあの唇マークをデカデカと縫いつけていたものですが、近頃はジーンズで最初に破れ出すのは後ろポケットの下、つまりお尻に集中するようになりました。膝が破れるのは、外出先でもそんなに支障はありません。最初っからこういうのなのさ、という顔をしていればいい。けれどもお尻だとそうはいきません。なにしろ、椅子に座ると冷たいんです、これが。

ですから、破れそうだなあ、と思ったら前もって布を伸ばして大きめに継ぎを当てておく、などという小技まで発明してしまいました。

「目立たない。」

けれど江戸時代の絵画では、唇は目立ちません。唇をモチーフにした文様も見あたりません。前回の爪と同じように、唇もあまり大きく描かれることはありません。鬼の口などが耳まで裂けていることはあっても、唇はかえって薄い。男性の唇が赤く塗られることはまずありませんし、女性の口も小さく丸くて、存在感は薄い。

鼻が大きく描かれることはあっても、唇はあるいは髭の下に隠れ、あるいは皺の中に埋もれて、見えなくなっています。

「考えてみれば。」

と、あれこれ思い巡らせながら伊藤若冲(じゃくちゅう)の画集をめくっております。若冲は普通の人物画というのをほとんど描かなかった人です。

いや、ほとんどというより、描いてないと言っても良いかも。お釈迦様やお坊様や仙人は、極楽での場面であったり背後に後輪があったりして、普通とは言えません。しかも全員が男性で、伏見人形と髑髏が性別不肖だとすると、若冲の人物画、ことに女性のはないことになります。

あの蕭白(しょうはく)すら、恐ろしげではありますが女性を描いています。決して普通ではないですが、確かに女性です。乙姫様のファンキーなのとか、花魁が失恋して悔しがって手紙を食いちぎっているのとか。

あまりに女性の画がないので、若冲は女性に興味がないのでは、とする説もあります。私は画家ではないし、女性に興味がないからすなわち画題にはしない、とも思えないのですが、とにかく、普通の美人画は見あたらない。

けれど、よくよく考えてみれば、ありました。鳥の嘴です。

人間の唇などより遙かに多様な、あるいは針のように細くあるいは拳のように丸く、そしておそらくそのすべてが人間の歯のように堅い嘴を、若冲はたくさんたくさん描いています。

特に好んだのは、鶏の、短いですが顔の割に縦幅のある、磨き上げたように艶のある嘴でした。

人に飼われながらも決して人には慣れない、我が物顔の鶏。雄も雌も、それはそれはよい嘴をしています。

いかがでしたか。近畿もついに梅雨明けです。

「鰐。」

鰐の大きな生き物といえば、鰐(わに)。けれども日本にはいません。

「因幡の白兎」というお話に出てくる鰐は、鮫なのだそうです。確かに鮫も鰐がでっかい。頬白鮫の歯は、奥の方から列を成して生え替わってくるのだそうで、そ

の大きな顎の中は歯まるけ。

「まるけ」は「だらけ」の関西弁。しかし、歯だらけ、というより歯まるけ、というほうが間抜けな感じがするのはなぜ。

でもそんな鮫は、よく食用にされたといいます。体の中に大量のアンモニアを蓄えているので、山奥まで運搬しても腐らないのだそうです。北の港から塩漬けの鯖を運んだ街道は鯖街道として有名ですが、鮫街道もきっとあったことでしょう。

良質のゼラチンは、貴重なタンパク源だったのだそうで、学校の行き帰りに鮫のヒモを嚙ったという思い出がある方、きっとすこぶる血管が丈夫になったことでしょう。

「さて。」

大きさだけでいえば鯨の顎が最大でしょう。マッコウクジラは顎と頭でできているような体です。

鯨を描いた画家といえば、長澤蘆雪(ろせつ)。けれども、それは丸みを帯びた黒い背中だけで、顎は見えません。鰐を描いているのは記憶にありません。さすがの伊藤若冲(じゃくちゅう)にも、鰐は見あたりませんでした。

けれど、鮫はおりました。魚魚の魚尽くし。鮫は底の方で、桜鯛よりも小さな体で、しかも顎は見えません。丸くて大きなつぶらな瞳と、傷一つない大きな鰭が目立つのみ。

他の魚で鮫ほどの大きな顎のものも、思い当たりません。画題に、おそらくもっとも頻繁に用いられるのであろう鯉は、ころっと丸いおちょぼ口です。

それならば河馬はいないか。若冲の屏風画の写真を睨んでみます。

細かい升目を中を塗り分けることによって、まるでテレビの画面のような立体感を持った屏風には、麒麟から鷺鳥から火食鳥まで、空想上の動物の姿も混じっていて、ゴージャスこの上ありません。

けれど、河馬はいない。水の中で楽しそうに泳ぐ馬はいますが。

「考えてみれば。」

そういえば、大きな顎は別に実在の生き物だけが持っているとは限らない。アフ

リカ大陸にしかない動物は、江戸時代の画家にとっては空想上の動物も同じこと。決して実際に目にすることはできない、噂で聞くか、あるいは他の画家が描いたものの転写を手に入れられればいい方です。

河馬の噂は届かなくても、麒麟や龍の姿を描くことはできる。日本の空を飛ぶことはなかった九官鳥や緑の鸚鵡が、若冲の屏風の中には群れ遊んでいます。

私たちは現在、ほぼ世界中の動物を直に目にすることができます。いや、実際には滅びてしまった動物さえ、目にすることができます。

そういえば、そんな動物たちを動物園で写生するとき、無性にやるせなく、もの悲しかったのは、それは、絵を描くのが嫌いだからではなかったのかもしれない。

私たちはもう、象も河馬も豹も虎も、空想の中にとどめておくことはできません。ただ美しいものとして想像するだけでは許されません。

檻の向こうにいる、彼らの実際の姿を、目の前に実際にあるように描かなければならなかった、しかも閉園までに、それがとんでもなくつまらなかった、からかもしれない。

いかがでしたか。閉めずの扉だったリビングの扉を閉めたら、風の流れが変わって、ちょっとだけ涼しい。

「髪。」

ずいぶんと長い間、日本の男性は長髪でした。もちろん結い上げてはありましたが、元取りを切ると肩なんて軽く越えてしまいます。

髪の長い男性は、汚いだのだらしないだのあれこれ言われます。最近でこそサラリーマンにも長髪の男性は増えてましたが、一昔は襟に付いただけでがたがた言われたものです。

けれども、本来日本の男性は髪を長く伸ばし、きれいに結い上げ撫でつけるのが大好きだったのです。

女性が男性よりも平均寿命が長いのは、鏡の前に立つ時間が長いから、という説があるのだそうです。自分の身だしなみを整えることは、健康管理にもなりますし、ストレス解消にもなるのだそうです。

江戸時代の男性は、おそらく現代の男性より遙かに長く自分の髪をいじっていたことでしょう。もちろん髭も剃りますが、月代もきれいに剃らなければならない。鬘の形にも流行がありますから、房を太くしたり細くしたりちょっとひねったりしなければならない。ただただポマードやムースで固めてしまうより、ずっとずっと楽しかったのに違いありません。

真っ黒で真っ直ぐな髪は、確かに美しい。男性の方が皮脂量が多いので、自然と艶も増します。鬘付け油の香りもほのかに。

「女性。」

かたや女性の髪は短くなっています。そして黄色くなったり赤くなったりして、肩のあたりでぼさぼさしています。

私は、長いのは好きです。特に若い男性の長いのが大好きです。もちろんですが格好良くないとだめです。すみません、ただのミーハーです。

でも、赤いのや黄色いのは好きではないのです。傷んでいる髪の間からは、本人は気づかないのかもしれませんが、独特の臭いがします。動物タンパク質の臭い。それに性ホルモンがたっぷり混ざっている。汗で蒸れていると、もっとひどくなります。そんな髪を長く伸ばした爪でしごくもんですから、体中からタンパク質。

そして、女性の場合、電車の中で髪を振り回す。髪でほっぺたを殴られたことが、一回や二回ではありません。

もしかしたら男性も振り回すのかもしれませんが、髪の長い男性はたいてい背が高いので、あまり実害はありません。

「逆で。」

女性の髪は、たいていは長いものでした。長くなければいけないもの、だったのかもしれませんが。長く美しい髪は、そのまま豊かさの象徴でした。かぐや姫の美しさを示すものとして、長くきらめく黒髪がありました。

かたや、男性の髪。長くなければならないわけではありませんでした。髪は結うものでしたから、必然として長くなった。そして近代に至って、短くなければならなくなった。

髪が長いのが女性で、短いのが男性、ということになった。それは短いと女ではなくなり、長いと男性ではなくなるということです。

そして現代。「…なければならない」の逆をいくことでどうなったか。髪の短い女性に似合う女性の服が売り出され、髪の長い男性のための化粧品が売り出されます。

それで男性は女性的に、女性は男性的になったか。いや、そうではない。かえって、女性は女性であることをさらに意識し、男性は男性に似合う女性的な装いを探し求めるようになった。

かくして、キューティクルの開いた髪から漏れ出すタンパク質の臭いに、今年もまた悩まされるのです。

いかがでしたか。浴衣が流行っている、のはいいいんですが、左前だけはお願いだからやめてください。

「臍。」

へそって、難しい漢字なんですねえ。多分、読めるけれど書けない漢字の前頭三枚目でしょう。

くぼんでいたり出っ張っていたり、小さいけれどちょっと目立つ、小さいながら意味のあるところを言います。だから、餡パンは哺乳類ではありませんが、臍を持っています。

思えば、体に関する漢字には難しいものが多い。特に、微妙な部分に関しての漢字は、仏教用語から来ている場合はとても書けたものではありません。

ほと、と聞いてすぐに陰と書ける人は物知りだし、まら、魔羅、摩羅が書ける人も相当なものです。ほとは女性のことで、まらは男性のことです。

ほとは「ほとけ」の語源だという説もあります。くぼんでいる部分のことを「ほと」というのだそうで、愛しくかわいらしいという語感を伴う「け」がついたとか。

「け」はハレとケという言葉に対照させれば、陰という意味も含むのでしょうし、繰り返しや柔らかみや諧謔性も伴います。「毛だらけ」とか「いたいけ」とか。

女性のことを観音様と言うこともありますから、ほとは拝む対象でもあったのでしょう。

「意外。」

まらについて広辞苑をめくっていて、ちょっと意外なことに気づきました。

まらは梵語で、「仏道修行を妨げ、人の心を惑わすもの。仏伝では、釈尊の成道を妨げようとした魔王の名」のだそうです。

儒教的な考えで行くと、人の心を惑わせるのは陰である女性であるべきで、陽であるところの男性が修行の妨げになった魔王の名を持っている、というのは意外でした。

それに、人の心、とありますが、まらで男女ともが惑わされるのでしょうか。普通の女性は個性のないものにはあまり惑いませんし、普通の男性はどちらかと言えば、ほとに迷う場合の方が多いでしょう。

それなら、どうやって妨げるのでしょうか。まさか、遮断機のように降りてくるのでしょうか。ちんちんちん、て。

「いつからか。」

いつから、陰が悪いもので悪事を成すもの、陽は良いもので正義の味方、になったのでしょうか。

私は、江戸時代あたりがくさいと睨んでいます。江戸時代になると庶民も本をよく読むようになり、口述だけでなく、書物による教育も盛んになります。

江戸時代の読み物と言えば黄表紙、エッチ系、というイメージがありますが、青少年を対象とした読み物として学者なども小説を書くことがありました。

江戸中期の国語学者に、富士谷成章(ふじたになりあきら)という人物がいます。彼の日本語の分類法は山田孝雄氏によって受け継がれ、今に残っています。といっても彼は幕府のお抱え学者でも何でもなくて、普通の町人です。普通よりは裕福ではありましたが、あまりに賢いので請われて富士谷家に養子に入りもしたのですが、やっぱり普通の町人でした。

惜しいことに早くに夭逝してしまい、いろいろな研究も中途になってしまったのですが、そんな彼が小説を残しています。

「白菊奇談」という漢文調の小説がそれです。お、とぴんと来た方は江戸時代

の小説にお詳しい。上田秋成の雨月物語の中にも、「菊花の契り」があります。秋成は成章とも成章の実の兄の皆川淇園とも親友で、おそらくは原稿の回し読みなどしていたことでしょう。

その小説が、とっても儒教色が強い。漢文調と言うこともありますが、美しくあるべき男女の姿、が描かれています。

学者は、物事を明らかにつまびらかにしようとします。それが学者の使命であり、喜びでもあります。ですから、彼らが小説の上でも陰陽の明確さ、善悪の明確さ、男女の明確さを探し求めたのも無理はない。

しかし世の中、すべてが明確になど、なるわけもなく。かくして、臍も引っ込んだり出っ張ったりするのでした。

いかがでしたか。臍のある餡パンが必ず美味しいわけではありません。

四季編

「夏。」

もう夏も終わりますね。ぱったりと蝉の声がやみ、コオロギが囁き始めました。トンボの群を見かけましたし、サルスベリの花も咲き始めました。

思えば夏は不思議な季節。夏の始まりを待ちこがれることはありませんし、みんな暑い暑いと文句をたれる。それなのに行く夏を惜しむことには、他の季節の終わりより強く深い悲しみが伴われる。

故景山民夫氏が、テレビでこんな発言をされていたことがありました。

「朝になるとさ、蚊取り線香がそのまんま、渦の形で灰になって残ってるでしょう。それを見ると、ああ、夏がまた一日終わっちゃったんだなあって、強烈に思ったね」

昔、燃えて灰になる香は、そのまま時を告げる役目もしていました。

細く長く練った香に、紐で重りを吊しておきます。火のついた香は時間とともに短くなり、ついに燃え尽きると重りが落ちて、真下に仕掛けてある鐘をこーん、と鳴らす。

蚊を落とすような強い香りをまき散らしながら熱く燃え尽きた香は、灰となって

もとの姿をとどめながら、けれど決して再び手にすることはできない。元の形に戻ることはない。

まさに灰は、夏の日を現すにふさわしいものです。

「祭り。」

そして、そんな夏にふさわしいのが祭り。もちろん江戸時代の京都や大阪には今と同じくらいの規模の祭りがあって、浴衣姿の善男善女が集いました。

そんな中でも、円山応挙が描いた四条河原の夕涼みの絵が涼しげ。

団扇や扇子を商う物売りの胸元は、売り声を高らかにあげるからなのでしょう、ちょっとはだけています。隣では飴売りが少し所在なさげに座っていて、飴買つてとねだる子供は、父親の袖を力任せに引っ張っています。床几に腰掛けて三味線をつま弾く美人もいれば、白く裾の長い着物に黒い羽織の、背の高い若い武士もいます。

応挙は絵の先生だったので、人物の描き方の手本を作っていました。

それは「人物正写図鑑」、あるいは「人物正写図法」といって、年齢や性別にふさわしい顔の描き方、動きの表現方法を細かに説明してあるものです。すなわち絵の辞書、辞典のようなもの。

そんなものを三十七歳の時に作ってしまう先生のことですから、夕涼みの絵も、実際の祭りの風景の写実とは限らない。先生が理想とした祭りの典型、京は四条の河原の夕涼みのために、人物を配したものかも知れない。

それでも、私が応挙の絵画の中で好きなのは、立派な学者や伝説の美女を描いたものより、普通の人々が普通の暮らしの姿で大勢集っている、柔らかい彩色画です。長い柄の洒落たキセルでゆっくり煙草をくゆらせたり、何が入っているのやら妙に大きな荷物をしょって足早だったり、どうみてもお坊さんなのに綺麗な女性と連れだって鼻の下を伸ばしていたりする、普通の人々の姿なのです。

「誰が楽しいか。」

応挙は都市部の出身ではありません。丹波の国穴田村、現在の京都府亀岡市の郊外の生まれです。ですから、京の暮らしはそのまま毎日が祭りのようだった

でしょう。

そして、様々な服装、顔つきの人々を描くことは、応挙にとって何よりの喜びだったことでしょう。それをまとめ上げることによってあまりにも完成された形式美に陥ってしまったと、言えなくもありませんが、形式美を構築するのも先生の役目ではあります。

あれやこれやと工夫を凝らしながら弟子を指導していて一番楽しかったのは、やはり先生たる応挙だったでしょう。そして、絵を描くという、祭りにあまりにも似た、派手で激しくしかし儚い踊りの輪の中で、見事に旗手を勤め上げたのでしょう。

いかがでしたか。人混みが苦手な大宮は、関西の三大祭りを一つも見ただけありません。

「秋。」

友人と話していて、面白いことに気づきました。

通信販売のカタログでは、季節はすっかり秋冬物。けれど、首筋にボアのついたコートなんて、確かに栗色が綺麗だけれど、見ているだけで暑い、首が痒い。

けれど、真冬に真夏の水着のカタログを見たからって、暖かくなれるわけではない。それはそれ、これはこれ。寒そうだなあとも思わないし、ほかほかと温もるわけでもない。

でもたとえ夏の終わりが近づいていても、湯気のもうもうと上がる鍋料理なんて、写真を見ただけで汗が出る。

どうも、暑さというやつは、どうしようもない、融通の利かないもので、視覚に訴えても思い通りの効果の出ないものであるらしい。確かに、赤い服や黒いジーンズより青いシャツや白いスカートの方が涼しげには見えますが、実際に紫外線を遮る能力が高いのは黒い方。

だから、友人が持っている日傘も、綺麗に真っ黒。私が背負っているリュックは太陽光線を吸収して、暑い何の。

「涼しさ。」

では、真夏に涼しさを感じさせるものは何か。

それは寒い冬ではなく、夏に隣接した秋。ほろ渋い梨の皮の赤みや、よく張りつめた葡萄の滴、指に絡まる桃の肌。もうすぐ栗も実ります。

西瓜やトマトより、秋を感じさせる果物の色。深く濃い実りの秋は、涼しくてこそその豊かさを約束するものです。

ことに葡萄の蔓の涼しさは格別のものです。江戸時代の絵画なら、伊藤若冲(じゃくちゅう)の葡萄がおすすめ。

軽やかでありながら、芯にはしっかりとした張りを湛え、台風一過の湿った土からぐんぐんと水分を吸い上げ、自らの大きな葉で強い日差しを微妙に調節しながら、甘く甘くなっていくのは丸い大きな実。それを狙うのは腕の長い器用な猿、毎日やってきては熟れ具合を確かめるあたり、なかなかの慎重派です。

ですから、水着のお姉さんやサーフィン姿のお兄さんを追いかけて回すのにいい加減疲れたら、梨や葡萄を買ってきて、ゆっくり一人で味わいましょう。冬の心得を体に染みこませるために、ゆっくりと時間を掛けて。

「あ。」

とか、なんとか偉そうに言っているながら、あまり使わない部屋に下げてある額縁。小さなもので、短冊を入れて飾るようになっています。立ったまま取り替えられる高さにあるにも拘わらず、入っている絵は、季節外れにもほどがある、梅に鶯です。

それに気づいたのは、西日を避けてパソコンをその部屋に持ち込んだ、夏も盛りの頃。鶯にしたのは新年に向けてでしたから、8ヶ月放っていたことになります。あ、そろそろ茄子にしよう、と思っている間に、窓の外はもうすっかり秋。

ついでなので、来年まであのままにしておきますか。

いかがでしたか。E-magazinで登録される方が急に増えています。

登録していただけるのは嬉しいんですが、何かあったんでしょうか。

「冬。」

いきなり涼しくなったので、長袖を出してきました。もう座っているだけで汗をかくこともなくなりました。

少しずつ冬支度を始める方が能率的であるはずなのですが、おそらくまた残暑の戻りがあって、半袖を引っ張り出すことになるのでしょう。

それでも目の前にやってくる冬。人間が秋になると寂しくなるのは、冬の訪れで食料が減りお腹が空く寂しさを先取りするからなのだそうです。厳しい冬は厳しい分だけ秋よりもさらに食べ物が美味しい。

夏のように咀嚼するだけで疲れ切るのでもなく、秋のように夏の再来に怯えることもない。正々堂々、暖かい物をたくさん食べられます。

それに、寒さは、寒いというだけでカロリーを消費させます。つまりすぐさま腹が減る。空いていない腹にどんな山海の珍味を詰め込んでも無駄なこと。空のお腹なら、昨日の晩ご飯の残り物も美味しく頂けるといえるものです。

「でもイメージは。」

それでも冬のイメージは、決して良い物ではありません。

「冬の時代」、という言葉は、冬という季節が今一番新しい、渋谷の若者にも大人気、という意味では決してありません。

もっと酷いのには氷河期、というのがありますが、冬の時代の方が悲しい響きがあります。氷河期ならみんな凍ってがちんがちん、マンモスぱおー、でいっそ潔い。冬ならば、かつては心ときめく春や華やかな夏、穏やかな秋もあったはずです。

江戸時代の絵画にとって冬の時代は第二次大戦後でした。外貨を獲得するために、たくさんの絵画が外国に流れたのだそうです。

もともと美術品は日本の重要な輸出品の一つで、カフェオレのボールに取っ手がないのは、東洋の陶器を模したからだそうです。

けれど、荒廃した国土の建て直しのために売られる絵画には、そんな小粋なエピソードはありません。国宝としてお寺の天井や襖絵に用いられていたものはよく残っていますが、運びやすい屏風絵は大量に流れました。

バブルの時に、どうしてそれらの絵画を買い戻さなかったのか。と思っているう

ちに、はじけたバブルは何もかも吹き飛ばしてしまいました。

「そして。」

そして、ついに失業率が5%を超えました。データーに集計されていない人々も含めば、もっと高いはずだそうです。

私たちは、今まで何を売ってきたのでしょうか。何を売り物にしながら、好景気を支えてきたのでしょうか。そして、本当に売るべき物は何だったのでしょうか。

今まで私たちは、時間を売り物にしてきたと思います。資格や能力を売ってきた人は、ほんの一握りでした。

けれども会社は、まるで巨大な鯨のように、ただ就業時間を潰すことだけの社員をも抱え込み、そういう社員が定期代を払ったり一杯飲み屋代を払ったり女房子供を養ったりして世の中にお金を排泄することをも社会的意義として成立させてきました。けれどもついに、蚤のように時間を潰しているだけの人々を、養いきれなくなってきました。

昔、役に立たない人を穀潰しと呼びました。今はおそらくそれは、刻潰しなのでしょう。

いかがでしたか。本当に涼しくて、丸くなって眠ってます。

「春。」

春と言えば花です。花と言えばチューリップ。チューリップと言えばオランダです。

日本に最初にやってきたオランダ人はヤン=ヨーステンという人で、彼が住んでいたことに因んで名付けられたのが東京の八重洲、なんていう特集がテレビで組まれていました。オランダの画家レンブラントは銅版画のための紙は和紙、と決めていたのだそうです。

日本人が最初に出会った西洋は、オランダでした。西洋と言えばオランダでした。

蘭学といえば西洋の最先端の学問を指しました。どちらの国も園芸が大好き、

日本は生花や鉢植えの輸出入量で現在だんとつの世界一だそうですし、オランダは世界の生花の六割、鉢植えの五割を生産しています。

オランダは土地が低い、日本は山地が多すぎる、つまりすぐに農地にできる土地がとても少ない。ですから日本はこの小さな島国で生きていくために必要不可欠な灌漑技術もオランダから学びました。

それでなのかどうなのか、日本人にはオランダに対してちょっとした思い入れがあります。「フランダースの犬」はオランダのお話。そう思っていないですか。さっきまでそう思っていたのは、私だけでしょうか。

子供の頃見たアニメでは風車が回っていた気がするし、町は花にあふれていたような気がするし、ヒロインの女の子は観光地のオランダ村などで目にするような格好をしていた気がするし、何しろ暖かそうだったし、それにヨーロッパで暖かいと言えば、オランダでしょう。

けれど違いました。

ベルギーでした。しかもフランダースは、よく考えてみれば英語読み。フランドル地方というのが正式名称になるようです。作者もイギリスの方でした。ルイズ・ド・ラ・ラメーという方です。

「柔らかなイメージ。」

海流の関係で、高緯度にあいながらオランダはとても温暖で、暖かく柔らかなイメージがあります。

地元ベルギーでは全く有名でないこのお話に日本人が夢中になったのは、貧しい少年が苦勞する話だから、おしんの西洋版なのだ、とする向きもあります。確かにそうです。だから、私はこのお話自体は好きではありません。

ベルギーは寒い。それにベルギーで有名な物はチョコレート。暖かかったら溶けてしまいます。

かたや、オランダは農業国です。日本もかつてはそうでした。ですから、貧しいからといって年端もいかない少年を村中で見殺しにしてしまう、などという村八分的なこともオランダならあり得ると、小学生だった大宮は思い込んだのです。

・・というより、ベルギーがぴんときななかったから、よく知っていて暖かいオランダにしてしまったのでしょう。そこはやはり小学生の大宮、賢いようでも、考えが足

りません。

けれど、好きだったシーンもあります。

イギリスに留学することになったアロアに、ネロが地図を示してこう言います。

「ほら、イギリスとオランダ(実際の台詞はベルギーだったんですが、私はオランダだと思いこんでいましたからオランダ)の間なんて、指一本の長さじゃないか」

原作を読んだことがないので、そんなシーンがあったのかどうかは知りません。付け足しかも知れません。けれど、市場で、量り売りのイチゴ飴をくるりと丸めた紙に入れて貰うのは、いいシーンでした。頬をふくらませつつイチゴ飴を舐めながら、私も恋人と語り合ってみたいと思ったものでした。まあ飴を舐めていたら喋れないのですが。

「そういえば。」

そういえば、「あらいぐまラスカル」にもイチゴ水が出てきましたね。私たちが現在イチゴだと思って食べているもののほとんどが草イチゴ、それもオランダイチゴです。

イチゴには、東洋のイメージはありません。西洋の果物です。東洋の果物の王が桃であるように、西洋の果物の女王はイチゴ。

かつてイチゴより愛されたアイドル、宮沢りえさんが、久しぶりにテレビ出演されていました。料理番組でチヂミを作っていたのですが、タネが多すぎたのでしょう、お皿に出すと崩れてしまいました。

すると彼女は、「大丈夫ですよ」と、スタジオの隅の大きな花瓶のそばに走っていき、黄色い小さな蘭の枝をちょっと折ってきて、巨大過ぎてお皿からなだれ落ちそうになっているチヂミに、そっと添えました。

半生のチヂミが、びっと引き締まったように見えました。

そんな小粋なことをする彼女のお父さんは、確かオランダの方だったと記憶しています。温暖で豊かなイメージを持ちながら、安楽死はいち早く認めてしまう、不思議な国に対する不思議な憧れを、最初の出会いから五百年たった今でも持ち続けているのは、私だけでしょうか。

いかがでしたか。チヂミは生地に澱粉が入るので、柔らかくなりがちです。なるべく薄く焼きましょう。

「台風。」

台風は、江戸時代は「野分」と呼ばれることがあったようです。のわき、と読みました。有名なところでは、下のような句です。

芭蕉野分して盥(たらい)に雨を聞夜哉 『武蔵曲(むさしぶり)』

一目でお分かりの通り、これは松尾芭蕉の句です。深川に移転してから芭蕉を好むようになり、俳名にしたといえます。

芭蕉はつまりはバナナ。梅や竹や松のような和風の植物ではありません。もっと暑く激しい気候の国で、強い風や雨にさらされつつ、濃い緑の葉を地面のすぐ近くまで垂らします。

そういえば、円山応挙の絵にも芭蕉が印象的に登場します。風には強いのですが代わりに柔らかく、すぐにささらのように切れてしまう芭蕉の葉の隙間から覗く唐の少年の瞳は、四百年たった今でも青く澄んでいます。

「対岸。」

対岸の火事よりこっちの台風、あまりに遠すぎて実感がわからない、それよりも台風一過の夕焼け、とサイトで発言した人がいました。単細胞な大宮は、掲示板で喧嘩を売ってしまいました。

けれど、私がすべきは、そんなことではありませんでした。震災と比べることや、真珠湾攻撃と比べることも。時代も状況も原因も違う物とのいたずらな比較は、判断を誤らせるだけです。

私がすべきは、夕焼けを見つめることでした。はるか西の大陸で起こったことを、起こっていることを、そしてこれから起こるであろうことを、冷静に見つめることでした。

まだ、ほとんど何も分かっていません。確実に分かっているのは、これが野分や

地震のような自然災害でなく、人間が起こしたのだということだけ。

「何をしないか。」

何をするか、何ができるのか、ということばかりが言われます。

けれども、わずか五十五年前まで、私たちは攻撃する側でした。パレスチナで驚喜していた人々の姿は、六十年前の日本人の姿でもあるのです。

私たちはそのために、自分を守る最低限の武器しか持つてはいけなかったことになりました。幸か不幸か、軍事力を極力減らした結果、税金を民生に振り分けることによって私たちは高い教育と高い技術と豊かな生活を手にすることができました。

そして今も、他の国に軍事力を行使することのできない憲法を、私たちは遵守しています。皮肉なことに、対岸の彼の国が作った憲法のために、彼の国を守るために戦うことができません。

それを今、その憲法を彼の国のために変えるのでしょうか。

そうならば、私たちにとって憲法は、一体なんなのでしょうか。誰のための憲法なのでしょうか。私たちにとって自主権とは何なのでしょうか。戦後私たちが守り続けてきたものは、根本としてきたものは、いったい何だったのでしょうか。

私たちは何ができないか。何をしてはいけなかったか。戦後を戦後として続けるために、私たちは明確にしなければなりません。かつて軍国主義で他の国のみならず自国の国民をも深く傷つけた国として、守るべきものは何なのか、そして本当に戦うべきものは何なのか。

この国が、国としてあり続けるために。

いかがでしたか。どうも、大宮は物静かな初老の男性だという誤解が一部であるようですが、実はごくごく短気な三十代です。

白いもの編

「石鹸。」

俳句が明治時代からの言葉であるように、石鹼も江戸時代にはシャボンと呼ばれていました。漢字の当て方は、林羅山に依れば「志也保牟」。

石鹼を水に溶かしてばしゃばしゃやると、泡が出ます。水が本来持つ表面張力を奪うからだそうですが、その性質を利用した遊びがシャボン玉遊び。

江戸で初めてシャボン玉屋が流行したのが延宝五年といえますから、西暦だと1677年。十年後に元禄時代がやってきますから、江戸時代のかなり初期の頃。

それはシャボンの液が丸い泡の形を保つからこそできる遊びで、自分の志を保って丸くなる、という漢字は、ポルトガル語である元の音を損なわず、しかも当て字として完璧です。

シャボンは玩具としては用いられましたが、体を洗うために大量に生産されることはありませんでした。体を洗うのには糠袋や鶯の糞という天然酵素がありましたし、髪を洗うには海藻を使いました。

かくして、石鹼が石鹼と広く呼ばれるためには明治を待たなければなりませんでした。

「あわあわ。」

昭和に入り、戦争が終わって洗濯機が発明されて始まったのが、石鹼の大量消費でした。洗剤を使い終わると底の方に応募券が入っていて、装飾品が当たる、なんていうのもありました。

とにかく使え、使えの時代でした。石鹼はせっかちに粉になり、てっとりばやく激しい泡を立てる、工業製品である「洗剤」になりました。

水の汚れがあまりに甚だしくなり、洗剤ではなく石鹼を使おうという運動が始まったのは、昭和もそろそろ終わりの頃でした。

けれども、石鹼にしたからといって問題は解決しませんでした。石鹼は有機物です。過剰な有機物は水を富栄養化させ、それを食べるプランクトンを大量発生させ、水中の酸素を奪い、魚を殺し、その死骸が腐敗することでさらに水は汚れていきます。

水質の向上には下水道整備が急務であるとやっと言われ出したのも、昭和の終わり頃です。

「剤と材。」

シャボンが石鹼になり、そして洗浄機能を高めた洗剤になったとき、汚れを落とす本来の目的よりも、早く溶けて泡がたくさん立って洗濯物が蛍光材で白くなる、ということに重点が置かれました。

そして、食物が食料になり、食材になったとき。

食べる、つまり人が口にするという本来の目的よりも、たくさん仕入れて安く売って利益を上げるということに重点が置かれるようになりました。

結果、食材は、金属や病原菌や異常なタンパク質を含むようになり、人の命を脅かすようになりました。

いかがでしたか。サイトに日記コーナーを作ったのは良いのですが、CGIに遊ばれてしまいました。

「餅。」

お餅は好きですか。日本のお餅は餅米で作るので、文字通りもちもちしています。韓国のお餅はうるち米なので、腰が強く煮込み料理に向いています。中国のお餅は小麦粉のお菓子。月餅が代表的。

お正月の、お雑煮のお餅の形は、四角が関東、丸が関西。

大宮は育ちは関西ですが、母の実家が三重県なので、お餅は切り餅です。鰹のだしで取ったおだしに、水菜と大根と人参、焼いた切り餅に鰹節、と至ってシンプルです。

でも日本中のお雑煮がそんなものだと思っていたので、友人の家ではお餅が丸く、白味噌を入れると聞いて驚愕。子供の頃、何故か白味噌がとても苦手だった大宮は、「そなんお雑煮と違うやん」と発言して喧嘩になりました。

今ではそんなことで喧嘩はしないし、白味噌も酢味噌にしたりしてよく食べるようになりました。まあ、白味噌のお味噌汁は、今でも少し苦手ですが。

うちでこうだからみんなそうなのだ、と思いこんでいることは他にもあって、私の母は双子なので世界中のお母さんが双子で、同じ顔をして東京弁を喋る人がい

るのだと思いこんでいました。

「ちょこっと。」

私の家庭は友人の家庭よりやや関東風らしくて、ですからやや亭主関白なのだそうです。

関西は、全部がそうだとは言いませんが、ほぼ全ての実権をお母さんが握っていて、びしっと決めてばしっと叱るのがおかあさんで、「おかあちゃん怖いなあ」と慰めてくれるのがお父さんなのだそうです。

本当の亭主関白はお父さんのおかずが一つ多いのだそうですが、私は大体夕飯に納豆や砂肝の炊いたのが付いていて、そんなら私はこの家の亭主かい、などと思ったものでした。

けれど、確かに父親の嫌いなハンバーグやスパゲティが食卓に上ることはほとんどありませんでしたし、納豆を食べるのは家族で私一人でした。

そして、父は鍋奉行で、「なんでも入ってるっ」と叫びながらほくほくと鍋をつつくのが好きでした。母はオープン料理が好きで、骨付きの鶏肉の中にパセリバターをくるんで焼いたもの、なんていうのが得意でした。

少し胃弱だったからか、私は子供の頃から苦いものや酸っぱいものが好きでした。ウドの酢味噌あえやきんぴらゴボウ、揚げ魚の甘酢あえ、枝豆にチーズなど、すぐに酒の肴になるものが好きだった私には、ちっとも子供っぽくない食卓は、とても居心地のいいものでしたが。

「絵画にも。」

絵画にも江戸前と関西風があります。比較として一番わかりやすいのが浮世絵と肉筆画。薄くて軽い、流行の先端を行く浮世絵は江戸っ子の気性にぴったりでした。

対して、注文してから作成してもらう、軽いどころか大きいものは持ち運ぶことさえ不可能な肉筆画は、派手好きな関西人の好み。

そして、それはどちらも大人の好みでした。

けれども今は、子供の好みは何よりも優先。子供が好きだから、子供がこういう

のがいいって言うから。

子供は子供で子供だから。

父の好みも、母の趣味も、子供の前にひれ伏してしまいます。

私の両親は、食の細い私のために納豆を私にだけ食べさせることはしましたが、子供向きの味付けにしようとしたり、子供向きの料理を作ったりすることはありませんでした。

ですから、私たち姉妹はレストランで走り回ったりはしませんでした。

乳児に蜂蜜を食べさせたり、やたら辛いものを食べさせるのはともかくとして、普段は子供による子供の子供のための食卓にする癖に、いざ外食すると限りなく行儀が悪くてもほったらかしなのは、逆、なんじゃないでしょうか。

いかがでしたか。だから、たまに行儀のいい子供がいたら、とんでもなく可愛く見えます。



ちょっと近世・ほんと現代 その3 vol.2
2019年12月31日

著者 大宮ししゅう
発行所 Paper*Back*Factory

メインサイト ちょっと近世・ほんと現代
(URLは著者セントラルに記載)

From PDF : Quartz PDF Context

© Shishow Ohmiya 2019